

【講評文】8月10日（水） 8校目

「ライラックライク」 岐阜北高校

歩行祭という一つの伝統行事にそれぞれ向き合う親子の関係が描かれ、両者がそれぞれ違う道でも同じ方向へ向かって歩んでいる様子が感じ取れる劇でした。主人公である

「花」はその進む道を「足跡」と呼び、母親の芽衣子はそれを「足音」と呼ぶところから、娘である花は母親の跡を追いかけて、芽衣子は花を呼ぶように道を作っているように感じられました。一人一人が自身のキャラクターを明確にもち、それぞれに合った話し方や表現がまた、この劇に観客が夢中になる要因の一つでもあったのではないのでしょうか。

キャストの皆さんは始終動きの絶えない、舞台上を所狭しと歩き回る場面が多いにもかかわらず、台詞や音楽の重要度が増す場面においてその足音や雑音を消し、細かな部分に表現としての配慮や工夫をされていました。これにより、台詞は聞こえやすく劇に没入していくことができました。ラップの部分ではやや早口になり聞き取りにくい箇所があったものの、劇全体を通してその内容や人物の関係性が台詞や動きから良く伝わりました。

また、小道具や衣装、舞台美術にも工夫を感じました。衣装替えがとてもスムーズで、気づけば違う服になっているなど驚かせてもらえました。装置も高低差と奥行きをうまく使い、白を基調とした美しいもので、この劇に最適なものだったように感じます。照明では、白の装置がとにかく映えるよう調整され、まるで2本の道が一つに交わるようで美しい弧を描いていました。

タイトルの「ライラックライク」に関して、講評でも議論が交わされました。「ライラック」とはヨーロッパ原産の花で薄紫色や白の花を咲かせる。花言葉は友情。「ライク」は「好き」を表す「Like」を当てはめ、ここでは「～に似た」とも解釈する。ライラックライクとは「友情を愛する」また「友情に似た」とし、ほとんど面識のない母娘をつなぐものは、親子の情愛よりむしろ、同じ場所を求める者としての奇妙な友情だったのではないかと。母を知らない花が芽衣子を友人やライバルのように感じ、自身の先を行く存在として「あの人」と呼ぶ。花にとっての芽衣子とは、ライラックの花が芽吹くような、友情と愛の繋がりをを感じる存在だったように感じます。少し変わった感覚の母娘、二人がすれ違ったときに生まれた「交わった」の台詞に、この劇の核を見たように思いました。

岐阜北高校のみなさん、上演お疲れさまでした。

（文責 岐阜工業高校1年 わか）